

いっしきてんじん

一色天神遺跡(本発掘調査B)

所在地 稲沢市一色森山町225-1
(北緯35度14分05秒 東経136度44分54秒)

調査理由 いなざわ特別支援学校校舎建築工事

調査期間 令和6年9月～12月

調査面積 1,100㎡

担当者 木川正夫・木村有作・武部真木



調査地点(1/2.5万「清洲」)

調査の経過 調査は、愛知県教育委員会財務施設課によるいなざわ特別支援学校校舎建築工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、実施した。調査期間は令和6年9月から12月、調査面積は1,100㎡である。調査では校舎建築予定地を24A区と設定し、Aa区(西半部)とAb区(東半部)に分割して行い、駐輪場新設予定地は24Aa区の南西突出部、受水槽新設予定地は24B区として調査を実施した。

立地と環境 遺跡は尾張平野の中央部、三宅川と日光川に挟まれた沖積低地に位置し、周辺地形は網状に広がる旧流路によって形成された島状の微高地と後背湿地で構成される。また伊勢湾第二浜堤の微高地の一面にあたる。この伊勢湾第二浜堤上に立地する弥生時代の集落遺跡は、東から順に野口・北出遺跡(前期～中期)、一色青海遺跡(中期)、跡ノ口遺跡(中期～後期)、一色天神遺跡(後期～古墳時代初頭)がある。

調査の概要 24Ab区東端付近は調査区外に広がるように湿地状の堆積が認められた。それより西側の微高地では弥生土器を含む黒色土包含層の堆積が認められ、黒色土を埋土とする溝が東西方向、南北方向の溝群として確認された。24Ab区東端部では耕作に伴うとみられる複数の溝が並び、付近ではS字状口縁台付甕や高坏が出土した。このほか24Aa区の土坑より人面の可能性が考えられる刻線文のある弥生土器片1点が出土している。

中世 この黒色土層より上には河川氾濫による砂質土が厚く堆積し、検出された遺構は中世の竪穴状遺構・掘立柱建物柱穴・溝・土坑・道路状遺構がある。竪穴状遺構としたものは平面形が隅丸方形を呈した建物柱穴が確認できないもので、24A区で3棟、24B区で1棟が見つかっている。いくつかの遺構床面では鉄滓が出土したほか、鉄製品、砥石や24Aa区134SKでは加えて焼土と焼石を検出し、鍛冶関連の作業が行われていたと推定される。また、竪穴状遺構は複数の重複しており、出土した山茶碗などから14世紀後半から15世紀初頭にかけて作業場として断続的に利用されていたと考えられる。これらの廃絶後には墓域となった時期があり、銅銭(北宋銭)数枚と山茶碗を伴う土壇墓2基が検出されている。

24Ab区では昭和50年代まで使われていた南北方向の大畦畔があり、下層の西側では並行して中世の溝が2条、大畦畔の直下では地盤改良を目的とした道路地業である波板状凹凸面が検出された。少なくとも中世以降にこの辺りが低地部との境界として意識されてきた可能性が考えられる。

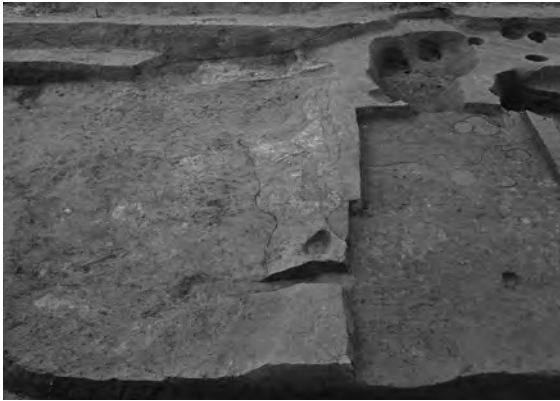
まとめ 調査範囲は東側に傾斜する微高地の周縁部にあたり、近接する集落遺跡よりは少し遅れて弥生時代後期以降に集落が成立したと考えられる。また、14世紀後半を中心とした室町時代には、鍛冶関連の作業場として利用された。一帯で河川流路が比較的安定していた時期の微高地縁辺の土地利用状況がうかがわれる。(木川正夫・武部真木)



24B区の竪穴状遺構009SI(西から)



24Aa区134SI床面焼土、焼石検出状況(北から)



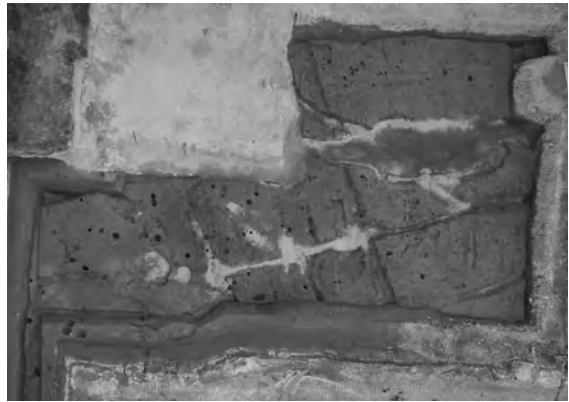
24Aa区道状遺構198SXの残存状況(北から)



24Aa区上面全景(写真上が北)



24Aa区基盤直上 溝446SD検出状況(東から)



24Aa区下面完掘状況(写真上が北)



24Ab区波板状凹凸面を伴う道路状遺構(北から)



24Ab区完掘状況(写真上が南)